

新しい時代に 皆で考えたいこと

神戸大学大学院自然科学研究科
田中 成典

2004年8月18日
CBI学会人材育成シンポジウム
「先端的学際領域の専門教育と仕事の機会」

これは我々みんなの問題：決して「他人事」ではない

著者に会いたい

『思春期をめぐる冒険』 岩宮 恵子さん



文・中村謙
写真・中根静男

題名からうかがわれるように、臨床心理士で島根大助教授の岩宮恵子さんは、長年の村上春樹ファンだ。新作が出るたびに買い、3カ月ほどの間、繰り返し読み続ける。文庫が出たらまた買って読み、とじがゆるんできたらまた買い直すという。

副題は「心理療法と村上春樹の世界」。

岩宮さんを訪れたAさんの中学生の娘は、可愛がられて育った手のかからない子だったが、ある日突然学校

に行かなくなり、怒鳴ったり暴れたり、様子が一

変。援助交際をしていたことも分かった。

このケースのカウンセリングを進めるなかで、Aさんと娘、そして夫ら家族がたどった「心の旅」と、『羊をめぐる冒険』『海辺のカフカ』などの、春樹作品の世界を読み解いてゆく過程とが、二重らせんをなして進んでゆく。それが本書だ。フィクションとノンフィクションが呼応して、思春期という危うい世界を照らし出す。死、暴力、セックスなどが、目に見えな

問われているのは、大人

「向こう側」から、途方もない力で押し寄せてくる思春期。その「向こう側」と、目に見える現実である「こちら側」との、謎に満ちたつながりと断絶を、村上春樹は見事に作品化していると岩宮さん。「論理整合性から解放されている」というか、村上作品は、思春期の内面そのもの。貴重なヒントを与えてくれます」

中学校のスクールカウンセラー歴10年。

「明らかな問題が見当たらないのに、思春期を越えてゆくのが難しい子どもが増えています」。深刻な事件が相次ぐ背景が、現場でははっきり見えている。

「思春期の問題に真剣に向かい合おうと、大人は自分自身の問題から目をそらすことができなくなります。その「こころ」から逃げて、子どもをよくする方法を探しても、何も解決しません」。問われているのは大人なのだ。

(日本評論社・1680円)

今日の話の内容

- 自分自身のバックグラウンドの紹介
- 「現状」の分析(というか、日頃感じていること)
- 今後に向けての提案(というか、議論の叩き台)

自分自身のバックグラウンド

- 大学院では「理論プラズマ物理学」を専攻、理学博士。
- 2年間の助手経験を経て、東芝総合研究所(現、研究開発センター)に就職し14年間勤務。
- 東芝では、基礎研究所、新機能材料・デバイスラボラトリーに所属、主に物性理論(高温超伝導など)と計算機シミュレーション(ナノ&バイオ)の研究に従事。
- その間、1年半、カリフォルニア工科大学に留学。
- 2001年より、JSTの計算科学プロジェクトの研究代表者。
- 今年5月より、神戸大学(自然科学研究科/発達科学部)に異動、医療・薬学・環境等に関するシミュレーションに従事。

たしかに「理論系」の就職は厳しい

- 企業研究所にバブル期ほどの余裕と体力はない。
 - 「オンデマンド」で採用する傾向。
- JSTプロジェクトで雇用したポスドク研究員の次の就職先を見つけるのも大変。
 - 30歳前後の場合、次のポスドク(国内外)や企業への就職が主で、アカデミックポジションは難しい。
- 「環境科学」を専攻した大学の学生・院生たちも就職に苦勞している。
 - 「境界・学際領域」は「専門性の欠如」と取られがち。

大学の研究室は旧態依然では？

- 教授の名声を高めるためのピラミッド的な構図。
- 「自分に協力して良い仕事をする」が暗黙の原則。
- 広い視野を持った人材より、専門性を持った即戦力。
 - 「兵隊」として使う場合さえ見られる。
- 「自分を見習って傑出した仕事をすれば、ポジションはおのずとついてくる」という発想。
 - 「根性論」まかり通る。
 - 同業者の間で「勝ち抜く」。
 - 「落伍者」は自分で職を探す。
- 自らの専門性の社会的存在価値は殆ど省みられない。
 - 「天然記念物」、「人間国宝」、「職人」で構わない？
 - 「何人の人間を育てられるか」という発想の欠如。

企業は「競争が厳しい」という・・・

- 目先の成果を求める、より近視眼的な発想。
- 「何年後かには自分はここにいない」。
 - 自分は「広い見識」、部下は「役立つ専門性」。

新しい「しくみづくり」は可能か？

- 特異ケースの集積からシステム化へ。
- 日本独自のシステム(教育・研究・雇用)が必要？
- 「パイの奪い合い」から「Win-Win」へ向けて。
- 業界のマスを拡大することは可能か？
- この分野に対して「もっとお金を出していい」という世間の認知が必要。
- そのための業界のシステム改革、ひいては日本全体の構造改革まで視野を広げて考える必要。
- 「スター選手」が次々と輩出されるシステム作り？
 - Case Study: 野球界との比較(20代以前 vs 以後)

大学研究室の「(ベンチャー)企業化」?

- 「新しい価値を創造する会社」としての位置づけ?
 - 目先の利益にこだわらなくていいメリット
 - 但し、自らの値打ちの客観的評価・アセスメントは必要
- 東北大学・宮本研究室の事例
- 環境市民運動をサポートする大学活動に関する、神戸大学・小川正賢教授の提案
 - 欧米の「Science Shop」に似た組織
 - 日本型のビジネスモデル?
 - 学生・院生の就職の受け皿?
- 「プロの大学教師」職といった柔軟な発想
 - IT、バイオインフォマティクス系研究者の育成と位置づけ?

人材の需要と供給

- 「Position Taking」から「Position Making」の時代へ
 - 大学研究室の「職人的徒弟制度」の崩壊？
 - 従来の「専門家」vs「非専門家」の図式の崩壊？
- 「マッチング」の重要性
 - 大学や企業の戦略の明確化が進行
 - 情報のユビキタス化による個人の能力の均質化
 - 「売れること、必要とされることとは何か？」の考察が必要
- 専門性と広い視野、Dualな技能が要求される
 - Unique vs Universal、Seeds vs Needs
 - 理系研究者における文系的素養の必要性
 - 両者を兼ね備えた人材の育成

我々が考えなければならないこと

- 20代から30代にかけて、学生、院生、ポスドク、助手等を経てPermanent or Tentative Positionを見つける若手研究者の教育・育成の「淀みないフロー」
- 大学の研究室や国の研究所、企業の間の人材（+モノ・金）の円滑かつ恒常的な流れ
- これらを社会として支える体系的なシステムを協力して構想・構築しないと早晩その社会は衰退する。
- これらは厳しい自己評価（自らの組織の位置づけやLCA？）や将来ビジョンの構築とも密接に関係する、我々自身の問題である。
 - E.g., MOTプログラム、サイエンス・マスター・プログラム

日本の若者は優秀！

